メ　ル　ト　ソ　ウ　ル

イシュリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メルトソウル

【Ｎコード】
Ｎ０８９０Ｈ

【作者名】
イシュリオン

【あらすじ】
依頼請負人を生業とする少年ロキ。今回請け負った依頼は軍の研究施設の爆破。この依頼を受けたことにより、彼は自分の正体を知る手掛かりを発見する。

＝プロローグ＝

あの日を俺は忘れない
いつまでもなりやまない雨、真紅に包まれた俺の両手
俺の体に纏わり付く青白く光る電気。
その瞬間俺は何が起きたのか分からなかった。
それが分かるのはしばらく後のことだった。
雨は　止まない。
ビルに挟まれた路地裏で、俺は佇んでいる。
心の痛みが雨に呼応するように、俺の身体の奥で化物の血が雨に呼応していた。

彼の名はロキ＝ルナフォード。
職業は『依頼請負人』、人から請け負った依頼をこなし、その報酬で食い繋ぐ職業だ。
ワケアリな依頼が多く流れ込んで来るが、今回は今まででも最も厄介な依頼だった。
軍の研究施設の破壊。依頼人は不明。
だが、この依頼が彼の運命を大きく変える事になる。

第1話「ロキ」

俺には１１歳以前の記憶が全く無い。

路地裏で血まみれになっていた俺が今の俺の始まりだった。

「軍の研究施設の破壊？」

ロキは携帯電話ごしの相手に怪訝そうな返事をする。

「つべこべいうな、クライアントはお前をご指名なんだ。」

半分笑い声が混じった返事を返す電話相手。

「パス。俺は今まで散々厄介事引き受けてきたけど軍に喧嘩売ろうなんて依頼、誰が受けるか。」

「ダメだ。こちとら信用商売なんだよ。お前この依頼拒否されると困るんだよ～。報酬もかなりいいぜ？用心棒とあんまり変わらないだろ？」

元々ロキは「そういった部類」の厄介事を多く任されていた。用心棒だのマフィアグループの抗争に無理矢理首を突っ込まされたりだの（おまけにマフィアの抗争は、大方軍の末端からの依頼だ）、その仕事依頼遂行人では最も危険な部類だ。そんな危険な仕事ばかり背負わされているがロキは１６歳の若さでまだ一度も依頼を失敗した事がない。そのため裏の世界では知名度も高く、同時に恐れられ

てもいる。

ロキはため息を付いた。

「報酬はいくら？」

「しめて１０万」

「はした金じゃねえか！！誰だよそんな依頼出した馬鹿は～～～っっ」

「んじゃ、よろしく頼むな夜中の１１時に付近の公園に来いよ」「おい・・・・」

プツン、ツー・・・ツー・・・

相手は軽快な声でロキに言い、電話を切った。

「くそっ、用心棒ですら最低１５万はだしてたぞ」

ロキは悪態を吐いた。

金髪をグシャグシャに掻き、鞘と腰を鎖で縛り、その鞘にバスタードソードを入れる。

「・・・・・ったく、面倒くせえ」

ロキは紅いコートを羽織った。

第1話「ロキ」（後書き）

この世界には銃刀法違反等は適用されていない仕組みです。

第2話「同業者」

「ここか・・・っと」

ロキは研究施設付近の公園に行った。公園付近の通りに大勢の人がいた。公園から目の前にある電灯に腰かけている大柄の男がいた。ロキはそれが一般人を装った同業者だとすぐに分かった。

「例の依頼の遂行者だ。」

ロキが声を殺して頭にニット帽大柄の男に話しかける。大柄の男は唇を噛み締めて笑った。

「フン・・・・こんな大通りで依頼の内容を漏らすなよ?」

「安心しろ、必要以上の事は話さないさ。」

「ほう・・・・・ルーキーって訳じゃなさそうだ。いいだろう、来い」

男は手招きをしてロキを誘導した。

(なるほど、目印の役割を果たしてたのか、あのオッサンは)

ロキは男についていった。

ついていった先には、長い髪を束ねた黒髪の女と頭にキズのあるギザギザ髪の男がいた。ロキはその男が噛んでいるガムの咀嚼の音を余計に思ったが、宣言どおり余計な事は喋らなかった。

「さて、依頼内容の確認だ。」

大柄の男が話し始める。

「今回の依頼は研究施設の爆破だ。爆破の設置に関しては一階のエントランスフロアの右に位置するバイオ研究室だ。爆弾は各自一つずつ持たせておく。」

大柄の男は銀色の小さな箱を４つ取り出し、各自に配った。

「気付かれた場合広まる前に殺せ。どうせ任務で全員死ぬのは変わらない。」

「ああら、非常だこと。」

女が口を開いた。心底嬉しそうな笑みを浮かべる。

ロキはこの女は用心棒の任務には向いてないと思った。必要以上に相手を攻撃して逆効果になるからだ。

「じゃあいくか・・・・おいルーキー、死んでも保障しねえぞ？」

傷頭の男がニヤっと笑いロキに近づく。ロキはそれに笑顔で切り返した。優しそうな笑顔だったが・・・・

「・・・・・どっちがだ？」

ロキの冷たく冷え切った言葉に、男は少々たじろいだ。

「ケッ、可愛くないガキだぜ」

第3話「厄日・1」

「こんなデカい施設、ホントにこんなちっこいもので壊せるのかぁ？」

傷の男が銀色の箱を片手で弄びながら文句を吐く。

「安心しろ、威力は保障できる。目標地に誰か一つでも置けばそれで終わりだ」

大柄の男が合図をすると同時に他の二人は別の場所に移動した。

「チビ、お前は俺と潜入しろ。お前は今から支持する別の場所に迎え」

「力を均等にしたのか？」

「フン・・・・あいつ等は囮だ。どうせ居ても足を引っ張るだけだろうしな」

（やっぱこの仕事は一人の方が気楽でいいな・・・・）

ロキは男の微笑をみて思った。

「なら、一階のバイオ研究室で爆破ってのもニセの情報か？」

「当たり前だ。今回の依頼にあの二人は向いてない。血の気が多く無い実力をアピールしてるだけの役立たず。できるだけ目立って貰って俺達が楽に潜入できるように・・・っと」

研究施設のアラームが鳴り始めた。どうやら二人の潜入がバレたらしい。

「さて、いくか。」

男が裏口に回った。ロキはそれについて行く。

「ハッ、大した事ないな。」

傷の男が銃をしまった。床には沢山の屍が転がっている。女は最後に残った白衣を着た人物にナイフを突きつけていた。どうやら白衣を着た者は研究員らしい。

「この先かしら？バイオ研究室ってところは？」

「そ・・・・・そうだ・・・・・・い、命だけはァッ！！」

研究員が言い終わる前に、女は喉を掻き切った。一瞬で絶命した研究員の屍を蹴り倒し、バイオ研究室の扉に屍から奪ったカードキーをかざす。

「簡単な依頼ね。私にかかればこんなの」

女はしりもちをついた。バイオ研究室の中には培養液の中に浮かんだ怪物が何体もいた。

「な、なによこれ・・・・・！こんなの聞いてないわよ・・・・・

！！」

傷の男が中を覗き込んだ。次の瞬間傷の男は首を&#２５４４５；がれ、床に転がった。

一匹だけいた。

培養液のカプセルから抜け出したと思われる怪物が。

非常に長い腕にはいくつもの鋭い突起が並び、体躯は３ｍ程もある。地面を蹴る足は短く、動きはのろそうだが、腕の間合いは異常に広い。

「あ・・・・・は・・・・・・」

怪物の黄色く光る目が女に向けられる。彼女を標的にしたようだった。そして、彼女に向かって腕を振り下ろした。

「あああぎゃあああああああああああああ！！！」

叫び声終わると共に、彼女も絶命した。

第3話「厄日・1」（後書き）

メールをくれたお方へ

その内、ムサいオヤジや奇天烈なお姉さんばかりのストーリーじゃなくなりますので・・・・

アドバイスありがとうございました

第4話「シャルヴァ」

ロキが研究員の首を叩く。研究員は根を上げずに地面に伏した。その研究員を抱えて歩き出した。その直後携帯電話が震え出した。ロキは携帯電話を取り出し、開いて相手を確認した。相手は不明。恐らく大男だろう。

「何だ。」

「早く出ろ、やばい事になった。」

「なんだ、今度はアンタがしくじったのか？」

大男の焦った声を聞いて嘲笑するロキ。大男は声を荒げて怒鳴った。

「あのバカ共のせいだよ！！お陰様でこの建物の怪物を起こしやがった！」

「ん？あれか？バイオ研究室」

「とりあえずでろ！あんな怪物相手にしてたらこっちが死んじまう！」

大男が銃を乱射してる音が聞こえた。

「とりあえずすぐ加勢にいく。どこで落ち合う？」

「いいから逃げろ！俺もすぐにでる！！クソ・・・・・切るぞ！」

ロキは電話が切れたのを確認し。携帯電話を閉じた。そして床に転がっている研究員を抱え直した。

大男が銃を3発、巨大な化物に向かって撃つ。二つは外れたが、一つは頭に当たった。しかし化物はひるまず、両腕を交差して大男を攻撃する。大男はそれをしゃがんで回避し、化物の真下に潜り込んで、後方に回った。

大男の俊敏な動きに苛立ちを覚えた様子で、刃のついた両腕を無茶苦茶に振り回し始めた。その刃を男はうまくかわすが、捕らえられるのも時間の問題だった。

大男の銃弾が左足と心臓、そして目を貫いた。男もかなりやりてのガンマンで、リボルバーの弾層から弾が無くなった時の交換には3秒とかかっていない。

化物は片目を失い不利となったが、未だに腕を振り回している奴には関係が無かった。

とうとう化物の腕についている尖爪が男の左肩を切り裂いた。

「ぐあっ！！」

男は跪き、痛みで銃を握る握力を出せず、左手の拳銃を落とした。最後の抵抗で右手に残った拳銃で化物の頭部を撃った。弾丸は化物の顎から脳天まで貫通したが、化物は怯まなかった。

「この・・・・・バケモノ・・・・・！！」

化物が牙を剥き、男を喰い殺そうとする。
その瞬間、化物の腹部からバスタードソードが飛び出す。
ロキが背中に乗り上げ、腹を突き刺していた。
「ギャオオオオオオオオオオオ！！」
化物が苦痛の悲鳴を上げる
剣を横に薙ぎ、ロキが空中に舞い上がる。ロキは空中で一回転し、化物を頭部から一刀両断した。
化物は悲鳴を上げる間もなく息絶えて、地面に倒れ込んだ。
ロキが剣を振り、化物の血を落とし、鞘に直した。
「危ないところだったな」
「何で俺を助けた？」
男は全く分からないという顔でロキに尋ねた。ロキは他所を向いて答えた。
「人が死ぬのを・・・・見たくないからだ」
「何いってやがる！！人が死ぬのが見てられないだ！？今回の依頼が成功したらこの研究所にいる奴等は」

「ここにいる人間は俺とアンタだけだ。他の奴は全員外に出したよ・・・・・救えなかった人もいるけどな」

ロキは床に転がった沢山の死体を見ながら言った。

「だから嫌だっていったんだよ・・・・」

「馬鹿な、この短期間でどうやってあんな人数を・・・・・」

「教えてやろうか？」

大男の問いに、ロキではない誰かが答える。

廊下の壁に隠れていた者が姿を現した。

「そいつはシャルヴァと呼ばれる・・・・・怪物だ」

第5話「異能力者同士の戦い」

姿を現した者は身長は１７０ｃｍ位の少年だった。水色の髪に感情のこもってない淡い青の瞳。軍の佐官が着用している軍服を着ている。

「誰だ・・・・アンタ？」

ロキの問いに答えずに少年は軍服から投げナイフを取り出し、ロキの頭にに投げつける。ロキはそれを回避した。

「シャルヴァってなんだ？」

大男が横から割って入る。

「見せてやろうか？」

少年の足元に水が逆巻き始める。

「な・・・・・・！！」

ロキが鞘から剣を抜き、横に構える。次の瞬間・・・・・・

シュン！

かなりの速さで何かが飛んできた。ロキはそれを弾く。

「水の刃・・・・・？」

少年の足元の水が４つの鎖鎌状の『水の刃』に変わっていた。

「これがシャルヴァだ。お前も見せろ、ロキ＝ルナフォード」

「何で俺の名ま・・・・うぉっ！？」

２つの水の刃が攻撃してくる。ロキは一つ目を跳んでかわし、二つ目は剣で弾いた。ロキは地面に着地し、少年に向かって走っていく。

「アンタだけ知ってちゃあフェアじゃないな！教えろよ、名前！」

少年がロキの間合いに入った。ロキは体を捻り、体重を乗せた斬撃を仕掛ける。水の刃が斬撃を弾いたが、水の刃も形を失い、床に元の水として散らばった。

「試験体Ａ＝０４２だ。」

少年が一瞬憎しみを込めた顔をした。ロキはそれを見て一瞬動きを止めた。

その時、早さも硬度もさっきまでと全く別物の刃が襲い掛かる。ロキはそれを防ぐが、少年の蹴りを食らい、のけぞる。

「ぐっ・・・・つぅ・・・・」

「早く力を見せろ、でなければ・・・・死ぬぞ」

第6話「ロキの力」

「はっ・・・あれこそ化物じゃねえか・・・・」

試験体Ａ－０４２の水を操る能力を見た男は呟く。男は痛みと出血に耐えながらリボルバーに弾を込める。

「余計な事をするな」

Ａ－０４２の水の刃が男の首元に切っ先をかけていた。男は銃を落とした。

「貴様に様は無い」

「らァッ！！」

ロキがＡ－０４２の足を斬りつけようとする。Ａ－０４２は跳んで回避し、ロキの顔面に蹴りを入れた。モロに喰らったロキは数ｍ吹き飛ばされたが、受身を取って体制を立て直した。

「早く出ろよ、オッサン。アンタは邪魔だ」

「な・・・・！馬鹿いってるんじゃねえ！このままじゃお前も殺されるぞ！！」

「いいから出ろ。」

ロキの声色が変わる。男はロキがいっている事を承諾し、よろめきながら歩き、エントランスの自動ドアの前で立ち止まった。。

「ガロムだ。覚えておけ、ロキ」

ガロムと名乗った大男は自動ドアが開くと共に再び歩いて、姿を消した。

「これで、気兼ねなく力を出せるな。そのシャルヴァって力を。」

ロキが目を瞑った。Ａ－０４２の両の掌に水が集まり、２つの水で構築された剣になった。

ロキの体が電気を帯び始める。Ａ－０４２は地面にある２本の水の刃でロキを攻撃した。

ロキが目を開いたと同時に２本の水の刃は崩れ、地面に散らばった。

「これがお前の言ってる力だ。」

ロキがＡ－０４２に向かって走り出す。Ａ－０４２は右手の剣を胸の前で横にかまえ、左のはだらりと力無くリラックスした状態で下げる。どうやら右で防御をする様だ

ロキが一瞬姿を消した。Ａ－０４２はそれに一瞬とまどった。ロキはＡ－０４２の背後に回っていた。

「くっ！」

Ａ－０４２が水の刃を２本、盾として使用するが、少し斬撃の速度を遅くしただけだった。Ａ－０４２はうまくバスタードソードをしのいだが、その威力に押されもう一本の剣で攻撃する余裕は無かっ

た。

「どうした？余裕が無さそうだが。」

ロキの問いにＡ－０４２は沈黙する。

ロキはまた攻撃を仕掛ける。ロキは１０ｍ近く跳び、Ａ－０４２に斬りかかる。その時・・・

「なっ！！？」

強烈な光がエントランス中に広がる。ロキの上空からの攻撃をかわす術は無かった。

「もらったあああ！！」

ロキの声を利用し聴覚だけで反応し、ロキの斬撃をうまくふさいだ、が、その斬撃は異様に軽く、勢い余って切断してしまった。

「・・・・？」

それはロキのバスタードソードの鞘だった。自動ドアが開く音がしたことでロキがどこにいるのかようやくＡ－０４２は理解できた。

「相手はまた今度ってことで。時間も無いし。」

建物で大きな爆発が起こった。揺れがＡ－０４２を襲ったが、ロキは既にＡ－０４２の付近にいなかった。

「ちっ・・・・閃光弾か・・・・・・」

Ａ－０４２を渦巻が囲った。渦巻が消えた時、そこにＡ－０４２はいなかった。

第7話「厄日・2」

「あー・・・・・ホンマにバラけてもーた・・・・どないします？」
研究施設から１００ｍ程はなれたビルの屋上で男が双眼鏡を片手で持ち、もう片手で首の無線のボタンを押さえながら話している。
「Ａ－０４２・・・・スレイン＝エデュリスはどうなった？」
「さぁ・・・・生きとると思いますけど、連絡はありません」
「そうか、死んでくれれば有り難いがな。自我が芽生え始めた奴は用済みだ。Ａクラスを無くすのは非常に痛い事だが。・・・・自分の名を知らずに死ぬとは、滑稽な話だ。」
「俺は貴方の計画には関係ありまへんので、奴にバレても俺はなーんも首突っ込みませんよ。それと・・・・・ロキ＝ルナフォード、あたりでしたよ。研究施設の画像、みなはりました？途中で途切れちゃいましたけど」
「ああ・・・・もう一段階実験しておいてくれ。次はお前だ。ツバキ」
「はいはい・・・・」
ツバキと呼ばれた男は足元においていたスナイパーライフルに銃弾を込めた。

「殺すなよ」

「それは奴次第じゃないですか？」

「全く、こんな疲れる依頼初めてだったな・・・・・・」

ロキが近場の高台に崩れた研究施設の欠片を使い、転々と飛び移りながら上った。一気に１０ｍは跳べているその異常な跳躍力は、どう考えても人間のものではなかった。

高台に上りついたロキは研究施設の倒壊を確認すると、電話を掛けた。

「おいおっさん！！こんな無茶苦茶な依頼・・・・・・」

「ロキ＝ルナフォードやな？」

ロキは一瞬何か間違えたかと思ったが、電話番号が合ってる事で相手の悪ふざけだと思って流そうとした

「おっさん、また酒でも飲んで酔っぱらったか？」

「残念やけど、君の上司、消してもーたわ。俺らの邪魔しよるからのー、困ったモンやったで、ホンマ？」

「・・・・・アンタ誰だ？」

ロキが声色を変えた。

「誰でもええやないか。」

電話先の男・・・・ツバキが軽快な声で笑いながら言う。そして銃を構える音がした事でロキはようやく自分の危機を感じた。

「セカンドレッスン開始や、ロキ君」

ロキは鞘からバスタードソードを抜いた。ロキが携帯電話を投げ捨てると同時に、電話の向こうで弾を撃つ音が聞こえた。

ロキの真後ろから銃弾が襲った。ほんの一瞬でロキの心臓を貫ける距離まで達した銃弾は、ロキに貫くことなく剣に弾かれた。ロキは弾かれた銃弾の口径を見た。

（これは・・・・スナイパーライフル？こんなもので良くピンポイントで打てるな。）

ロキは高台から銃弾が放たれた方向を見る。しかしそっちには射撃に使えそうな建造物は何も無い。

またロキの背後から弾が忍び寄る。今度は頭を狙われていた。ロキはギリギリでかわし、銃弾は頬をかすめたが致命傷を逃れた。

（くそっ！どうなって・・・・・あそこか！）

ロキの目に止まったのは、同じ位の高さのビルだった。再び放たれた銃弾をロキは弾こうとした。しかし・・・・・

ヒュン！

ロキは銃弾を捕らえられなかった。銃弾は直線に曲がったのだ。もう一度ホーミングしてロキの右わき腹を貫く。

「ぐぁっ！！つ・・・・・ああ・・・・・」

ロキが苦しそうな声を上げる。口から血を垂らしたロキはもう銃弾を防ぐ力は無かった。

「あーあ・・・・・残念。お別れやな、ロキ君・・・・・・お？」

ロキは立ち上がりビルに向かって剣を構える。その目に諦めた様子は無かった。

「ここまで来る気かい・・・・面白いなぁ、ロキクン♪生き残れたらまた会おうや、ほな・・・・・さいなら」

ツバキが放った銃弾がまたロキの目の前でホーミングする。ロキの背後に回りまたホーミングし、ロキの背後を横に突っ切ろうとした所でまたホーミング・・・・・計三回のホーミングで

ロキの胸は、貫かれた

第7話「厄日・2」（後書き）

誤字等があったりしましたらご報告頂けるとありがたいです。

第8話「厄日・3」

「つっ・・・・・」

ロキは目を覚ました。

目を覚ました場所は草木が生い茂った場所だった。

「もう、大丈夫？」

その声の主はロキの傍らでちょこんと座っていた。

「・・・・・・アンタ誰？」

「起きていきなりそれですかー？折角助けてあげたのに」

傍らで座っていたいたのはあんまり年代の変わらない少女だった。

赤に近い茶色の髪に、ルビーの様な赤い目をしている。

「ここって・・・・・死後の世界？天国ってやつか？」

「残念、ここは私の家の庭だよ。気付いたらこの木の幹に血まみれで寄りかかってたからビックリしちゃった。」

ロキは撃たれた場所を手で探ってみた。しかし怪我した様子は無く、傷一つ無いことにロキは驚いた。

「あれ・・・・傷口が無い。」

「私は生まれつき不思議な力を持っててね。傷口に手を当てて、強く念じたらその人や動物のの傷を癒せるの。」

少女の掌を見ると小さな小鳥がうずくまっていた。どうやら翼を折っているらしい。しかし、少女の手に優しい緑色の光が宿り、時間が経つ毎に小鳥の翼は元の形に戻っていく。そして光が止んで、小鳥は大空に戻った。

「こんな風にね、まぁ、時間が経っていれば経っているほどその分時間はかかるんだけど。」

「アンタも、シャルヴァってやつなのか？」

「シャルヴァを知ってるの？」

「昨日、そのシャルヴァって奴にあったよ。どうやら俺もそうらしいけど」

「そっか・・・・貴方はシャルヴァだけど、軍に所属していないんだ。そんな人がいるなんて・・・・・」

「そういえば、変な怪物もいたな・・・・・一体軍は何をしてるんだ？」

「質問の荒らしだねー・・・・んー・・・・・・」

少女が考え込む。少女はしばらく悩んだ末に、閃いた様に顔をパッと輝かせ。両手を合わせた。

「じゃあこうしよ！私の名前だったりシャルヴァかどうかだったり、軍が何をしてるのかだったり、怪物の事だったり、全部教えるから。その代わり・・・・・この庭から連れ出して？」

「断る。ていうか絶対ヤだ。」

ロキは悩むことなく即答した。

「じゃあ、そういう事で、傷治してくれてありがとうな。」

ロキが振り向いてその場から立ち去ろうとする。

ガン！！

木の幹に銃弾が当たった。もう少し右に撃っていたら間違いなくロキの頭に直撃していただろうという所に。ロキはぎこちなくひきつった顔で振り返った。

銃弾を発したのは少女だった。美しい装飾が施された銃を構えている。

「へぇ～？命の恩人にそういう態度とっちゃうんだ～？いや、別にいいけどねー？ちょーっと酷いと思うなぁー？でも治した所、もっかい開けないとねー。フェアじゃないでしょー？」

（・・・・・・死？）

脅し・・・・いや、あの笑顔では本気なのかもしれない。

「でも、こんな軍の豪邸に住んでるお嬢様を浚ったら俺は確実に国

家反逆の罪で死刑・・・・」

「ここで死ぬのと、捕まって死ぬの、どっちがいい？」

「いや、まず親とかが悲しむんじゃないか？俺にはいないからそういう感情は分からないけど」

「・・・・私はここに監禁されてるの。」

少女の顔が暗くなる。

「殺されたのよ。年端もいかないシャルヴァに、両親も・・・・お兄ちゃんも」

「そっか、いわゆる復讐って奴をしたいとか？」

「そんなんじゃないけど・・・・ここにはいたくないから。鳥籠でいつまでも暮らすなんて嫌。」

「・・・・借りがあるから、引き受けてやる。」

俺が彼女の依頼を受けてしまったばかりに

俺は巻き込まれてしまったのかもしれない

俺があの依頼を受けたばかりに

俺は知ってしまったのかもしれない

今日は厄日だ

第9話「少女の依頼」

「しかし、こんな所一人で出ればいいんじゃないのか？」

ロキはふと思った。彼女はそれなりに腕も立つ様だし、ここの警備が余程薄くない限り抜ける事もできる筈だ。

「無理だよ、ここは私に対してのみ有効なカベがあるから」

「カベ？」

少女がロキの横を通り抜けた。そしてそこから数歩歩いて所で止まり、左手を伸ばした。

コーン・・・・

清らかな音を発して少女が伸ばした手の先で小さな波紋を作った。

少女が指を離し、ロキに振り向いて悲しそうに言う。

「私は彼等に取ってはカゴの中の鳥だから、必要になった時にしか外に出る術はないでしょうね。それに・・・・・そこにいっても、多分使い捨てにされると思う。」

「・・・・・どうすればいいんだ？その壁は俺には発動しないっていう事か？」

「そう、外側からカギがかかってるの。その鍵を外せば、ここの正面の門のカベが無効化されて、私は外に出る事ができる。」

「詳しいんだな。」

「ある人に教えて貰ったから。私の世話係の人に・・・・・本名は知らないけど、その人もシャルヴァで、とても強い人だった。Ａ－０４２っていう番号の人。」

「Ａ－０４２・・・・・？アイツか？あの機械みたいな野郎。」

「え！？知ってるの！！？」

「知ってるも何も無茶苦茶だったな。いきなり襲い掛かってくる上に能力が危険だ。」

「へー・・・・あんな人を相手に、よく生き残れたね。Ａクラスなんて今の時代そうそういないんだよ？」

「どうってことないっての、あんな奴。閃光弾お見舞いして簡単にトンズラできたし。・・・・それより、早く自由になりたいんだろ？俺も早くお前から解放されたいし、さっさと済ませようぜ」

「・・・・・愛想がないのね。」

「情なんて皆無の世界で育ってきたからな。外側の鍵ってのはどこにあるんだ？」

「門のところ。警備員も何人かいると思うから、気をつけてね。」

「はっ、昨日のに比べれば簡単な依頼になりそうだ。」

（しかし気になるな・・・・・俺が撃たれて、あの高さからじゃ即死だろうし、おまけにどうやってここに来たんだ？・・・・・誰かに救われた、とか？）

ロキは頭を過ぎった疑問を振り捨て、カベがあった部分を通り抜けた。

「あ・・・・・そうだ、アンタの名前は？」

「え・・・・・・・」

「俺はロキ。アンタは？」

「・・・・・サラ。」

「報酬の一部を先払いして貰ったからな、これでキャンセルはできなくなった。信用していいぞ。」

ロキはサラと名乗った少女に背を向け、走って行き、まもなく見えなくなった。

ロキは契約の際こういう風に報酬を数分の1をよく先払いさせて、どんなに危険だろうともう後戻りはできない状況を敢えて作るのだが、今回は彼女の名前が報酬の一部になっていたのでそれを聞いていつもどおりの状況を作ろうとしたのだが・・・・

「・・・・・ロマンチスト？」

彼女の目には、こう映ったらしい。

第9話「少女の依頼」（後書き）

厄日1と2，3はかなり中途半端で関連性がわからないと思われます。
ロキにとっては研究施設爆破の依頼の日と少女の依頼を受けた日が厄日となっている設定ですので、こういう位置づけをして置きたかっただけという作者の我侭です。
・・・・やっぱりわかりません？

第１０話「カゴの鳥」

ロキはサラの監禁されている庭の塀を飛んだ。塀の電気が流されている鉄線をロキは剣で切断し、屋敷の外に出た。その電気鉄線に感電することの無く、数mある塀を地面を一蹴りすれば軽々と飛び越える事ができる。そんな化物染みた力を嫌悪するような目で、自分の掌を見た。

ロキは己が他人と違うという事を信じたくなかった。シャルヴァは外見は全く人間と変わらない。それなのに人並み外れた身体能力、常人が扱うことのできない能力を持っている。その能力のせいでロキはどこにいっても疎まれ、人から優しさというものを受けた事がなかった。何年間も一人でずっと歩き続けた彼には、

もう他人に向ける感情等必要ないのではないか？

いつしかそう思うようにすらなった。

しかし、ロキは迷い始めた。サラのことだ。

初めて他人から救われ、一人で生きて、死んでいく道を補正した彼女の心の温もりが心から離れない。

人の命をゴミだと考えた事はないが、人と関わるのも、まんざらではない。サラと話して、そう思った。当の本人は彼女を突き放すような態度を取っていたが。

「おっと・・・・」

ロキは首を振った。

過去の事とサラの優しさ。心の中で知らない間に葛藤していた自分を馬鹿馬鹿しく思った。

彼は塀を伝う様に走り始めた。

しかし、追っ手は既にそこまで来ていた。

近くに木陰に隠れて見ていた関西弁の男・・・・ツバキが、電話で昨日の無線の男に報告していた。

「・・・・生きとりますよ、彼。ピンピンしてはります。」

「ロキが屋敷に逃げ込み、そこにサラが助けに入った・・・・？あの二人はグルだった・・・・？」

「どうします？貴方の仕組んだ罠にかかって本来なら死んだ筈の失敗作っちゅう事になりますけど。」

「サラを出すな。失敗サンプルは処分しても構わない。手加減したお前にも勝てない様なら『L・プロジェクト』の生き残りの線は確実に無いだろうからな。」

「・・・・了解。」

ツバキは銃を構えた。

その時のガシャン！というライフルを構える音でロキはツバキに気付いた。しかしロキにはツバキの姿が見えない。が、ロキには相手

が誰なのか分かっていた。

「またアンタか。」

「悪いなぁロキクン。折角拾った命なんやけど、サラをここから出されると色々と問題が生じるんや」

「カゴの鳥を自由にしてやる。悪いことには思えないけどな。」

「あれがカゴの鳥。馬鹿いいなさんなや。・・・・あれはシャルヴァとも人間ともちg」

ズバァ！

ロキが剣を抜いて、ツバキがいる木を横一文字に切った。木はなぎ倒したが、ツバキはバックステップで回避した。

「アンタの話になんざ、ハナっから興味ねえんだよ」

「そうかい。じゃあ名前くらい覚えとき。トウヤ＝ツバキ。ピッチピチの２２歳や」

第11話「ロキVSツバキ」

ツバキがつまらないジョークと共に、ロキに片手でライフルを向けて弾丸を放った。

ロキは頭を咄嗟に動かし、避けた。

（ホーミングなんざ使う一流のスナイパーの上に、片手でライフルを扱える・・・・無茶苦茶な野郎だ。）

姿勢を低くし、ツバキに突進するロキ。対するツバキはもう片方の余った手で腰のベルトからダガーナイフを取り出した。

ロキの一撃を、ダガーでうまくいなして後方へ受け流した。そして間髪入れずに2，3発ロキに撃ち込む。ロキは後ろに跳んだ。ロキの身体を電気が奔る。

ツバキの銃弾がまた直線に曲がる。3つとも曲がり、空気中で高速で乱反射する。

「今度は3つ。逃げ場もない。どないする？ロキ＝ルナフォード」

ツバキの声色が変わる。ロキはそれを全く気に留めなかった。

ロキに正面・真後ろ・頭上・・・・各方向から弾が飛んでくる。ロキは身体を横に捻り、正面と真後ろの弾をぶつけようとする。その間に頭上の弾を斬った。頭上からの弾丸が真っ二つに割れる。正面と真後ろの弾がぶつかる寸前に止まり、二つともロキの頭を狙う。しかし、頭上からの弾丸と同じように真っ二つに割れた。

（動きが違う・・・・！この前とは格別や。）

「依頼の邪魔だ。どけ。」

「何をいい気になっとるんや？まだまだこれからやろ？ロキクン」

ツバキは再びロキに3発撃った。空中でホーミングし、全てロキの心臓を狙う。一点に来た弾をタイミングを合わせて斬り落とす。

その瞬間、ツバキが背中からもう一つ新しい銃を出した。アサルトライフルだ。ロキがそれに気付く前にハンマーを降ろす。

「！！」（あんなバカデケーもんどこにしまってたんだ！）

ロキは逆さまの状態で地面に手を付き、後ろに飛び跳ねる。ツバキはスナイパーライフルを投げ捨て、ロキに接近していった。ツバキがアサルトライフルの引き金を恐ろしい速さで引いた。銃声は一度しか聞こえなかったが、2発弾丸が飛び出してきた。弾丸の速度も今までとは段違いだ。

「くっ・・・・・・そ！」

一つ目の弾丸を切り落としたが、もうひとつの弾丸がガラ空きの脳天へホーミングしながら導かれる。しかし、その弾丸はロキの左腕がが受け止めた。

（流石や。俺のホンキに少しだけでも対応できとる。でも片手を奪われちゃ御終いや。）

ロキが地面に着地した。ツバキは再び

「このままじゃまた同じ相手にやられてまうで。どうする？」

ロキは震える左手と右手でコートの両端を持った。

「・・・・こうしてやるよ」

「は？えっ・・・・・うわわ！！？」

ロキのコートの内側には無数のダイナマイトがあった。ロキはツバキの憔悴した顔をみてニヤリと笑い、ライターで長い導火線火をつけてツバキに走って近付いてきた。

「そ・ん・な・・・・・・あほなぁあああああああ！！？」

ツバキは逃げた。銃でロキを撃った場合、導火線引火させたらそれこそロキの本望だ。

「君はしぬんが怖くないんですかー！！？って・・・・アレ？」

気付いて振り返った時には、ロキはツバキの視界の外にいた。

「・・・・ぬぁあああああ！！？パチモンかいあのガキんちょめええええ！！」

ツバキはロキが向かったであろうゲートに向かった。

しかし、十数m動いた瞬間。ツバキの身体にワイヤーがぶつかった。

「にゃ？」

カチッという音と共に四方八方にあるダイナマイトに火が点く。そしてツバキの身体をワイヤーが取り巻き、縛り付けた。

「なっ・・・・い、いつのまにこんなん・・・・・・！！」

全てのダイナマイトが爆発し、数十メートルが吹き飛ばされる。

「火薬は減らしたんだけどな。結構効いたか？」

ロキはツバキにフェイントのかけたダイナマイトを捨てる。もちろんそれはニセモノで、コートに取り付けてあったダイナマイトはこれを除いて全てが本物だ。既に彼はツバキにカマをかけた後、前線を離脱していた。

ロキの付近を爆発の騒ぎを嗅ぎ付け警備員が行き交う。ロキはうまく１０ｍくらいの木の上に隠れ、見つからずに済んだ。そして木の上から見渡すと正面の門が見えた。警備員は誰一人いない。

ロキは警備員が見えなくなったのと同時に勢い良く木の上から跳んだ。正面の門の付近地面に着地した。門に妙な鍵が掛かっているいた。、ロキは斬り壊す。

パキン、という音がなる。

サラはそれに気付き、近くに居た様ですぐに正面の門にかけよってきた。

「・・・・これでいいか？」

「うん！ありが・・・・、・・・・・・・・・・・」

サラの喜んだ顔が冷めた様に無表情になっていく。

「おい！！貴様何をしている！」「サラが脱走したぞ！捕まえろー！！」

ロキから見て左側から大量の警備員がやってくる。ロキとサラは急いで右側に逃げ出した。

「ぜんっぜん信用に答えてくれないじゃない！！何してるのよ君は！！」

（・・・・依頼失敗？初の失敗か？コレ）

ロキの中にあった自尊心が音を立てて崩れていく。唯一の誇りといえた依頼遂行率１００％の自尊心が。

第12話「軍」

「・・・・つっ」

ロキがダイナマイトを仕掛けた位置の中心で彼は佇んでいた。ツバキトウヤだ。

服がボロボロになりそこに大量の擦り傷を作ってはいるが戦闘不能という感じではない。ワイヤーに雁字搦めにされ、無数のダイナマイトの中心に置かれたのにどうやって避けたというのか。

とりあえずは報告だ。

ズボンのポケットに手を伸ばし、携帯を取り出し、開く。しかし画面は黒一色のまま変化しない。

「やられてもーた・・・・後できっついお説教や。」

全く困った表情を見せず笑うツバキ。その表情は獲物を見つけたハンターの様だった。

「次会うときは容赦せんで・・・・ロキ＝ルナフォード」

ツバキはニヤリと笑う。気付けば近くに数人の警備員が不審そうにツバキを見つめ、銃を構えている。それを見てツバキの笑顔は消え、つまらなそうな表情で

「邪魔や。」

と、短く告げた。凄みのある声に警備員は気圧され、後ろに下がる。
ツバキが素早くアサルトライフルを構えた。

ロキとサラは屋敷から数ｋｍ離れた街中の路地裏に来ていた。

「あーくそ、なにしてんだか・・・・」

ロキが目を手で覆い、俯いて溜め息を吐いた。

元から研究所を爆破した為に指名手配は直ぐにでもされそうだが、
更に軍の機関が目を付けているこの少女の逃亡幇助した。彼は間違
いなく晴れて軍のブラックリストに名を連ねているだろう。

「あのー・・・色々とごめんね？・・・・あ、そうだ。約束通り、
シャルヴァとか色々と教えるよ。」

「あー・・・・そんなのもあったな。」

たかが情報の為にブラックリストに乗るなんざ、安い買い物だな。
とロキは自分をなじった。

「まず私の能力だけど、シャルヴァの物とは本質的に違うんだって。
私の能力は生まれ付きあったもので、シャルヴァの場合はその後に
手術を施して能力を無理矢理くっつけるような物らしいの。」

手術ぅ？とロキは地面にどっかりと座り込み、片手で頬を押さえな
がら気だるそうに訊く。

「うん。とても危険な手術でね、拒絶反応を起こして死ぬ人の方が多いの。」

「拒絶反応っていうと・・・・えーと・・・・何か別の物を入れてるんだよな？」

「そう。精霊の生命力に分類されているエネルギーをそのまま注入する。」

「・・・・は？精霊？」

ロキは唇の端を歪ませて苦々しい笑みを作った。話についていけない。それがロキの感想だ。彼は勿論頭の良い人間ではない為、情報整理なんかとてもできない。

「そう。全く別次元の生物で、この世界には存在していない。その生物が本来持っている能力を人間が使えるようにするっていう話なんだけど・・・・頭ついてこれてる？」

「だ・・・大丈夫だから続けろ。」

完全なハッタリだ。

「で、人間と精霊の生命力が中和できなかった場合に拒絶反応が起こったり、かなりの比率で死んでしまう。けど、その死者の中で精霊の生命力だけが活動を起こした場合。もう人間としての姿を維持するのはできなくなる。そしてロキ君がいってる怪物・・・・『アルケニ』になる。・・・・これが、軍のしてる事だよ。」

サラは悲しそうに続ける。

「彼らは人の命を唯の資材として使っている。だから私の両親も殺された。だからこそ止める。こんな事とめてみせる。」

「・・・・ご大層だな。仇討ちか？それともこれから死んでく人の為にか？」

ロキがここにきてようやく口を開いた。サラはそれを聞いて息を呑んだ。その言葉に少々苛立った様子だが、彼女は落ち着いた様子で

「・・・仇なんて討っても、また憎しみを作るだけ。だから後者だよ。」

「お前一人でどうにかなる問題じゃない。直ぐに鳥籠に戻されるだけだ。」

「君はなんとも思わないの！？こんな虐殺の連鎖を止めようと思わないの！？」

激昂したサラに。ロキは無表情に言う。

「興味が無い。俺は自分が殺すのは嫌だが、俺の見えない部分で死ぬ事は構わない。お前みたいな正義感持ち合わせちゃいない。唯のビビリだ。」

サラは立ち上がる。

「報酬は払ったから。これでいいでしょう？」

サラはどこかに向かって歩き出す。

「・・・・平和な頭だな。本当に一人でどうにかなると思っていんのか？折角手に入れた自由だ。外国に逃げれば軍は追ってこない。好きに生きようとは思わねェのか？」

「私は黙ってみてられないから。」

完全にサラの姿が見えなくなる。

（・・・・本当に馬鹿だな。あの程度でどうにかなる訳がない）

ロキは自分の掌を眺めて、しばらくして立ち上がる。

（とりあえず、この街にいりゃ捕まるな。直ぐにでも他の街に移動しねェと・・・・）

ロキは去った少女の事を思い出す。あのまま戻れば水の泡。かといってロキに助ける理由も無い。

（・・・・・関係無いな）

ロキも立ち上がり、サラと正反対の方向へ歩き出す。

第１３話「新たな依頼」

（わかってるよ・・・・私一人なんかじゃ、どうにもならないって事くらい）

サラは街中をトボトボと一人歩く。彼女にも自分の非力は理解できている。しかし軍を止めなければ大変な事になる。その『大変な事』になる理由は、ロキには敢えて話していないが。

（・・・・・でも、止めなくちゃ）

「わっ！」

その瞬間、彼女は人にぶつかった。

しりもちをついて謝ろうとするサラ。

しかし彼女は目の前に居る人間を見て凍りつく。

（・・・・・軍人！！）

目の前にいるのは２ｍはありそうな、茶髪のドスが効いた顔の・・・・・悪い言い方をすれば、悪人顔の軍人だ。

「あーあー。目標を確認。至急増援部隊を求む」

（やばい！）

サラは軍人と逆方向に走り出す。直ぐに人ゴミから抜け出し、路地

裏に入り込む。

軍人はゆっくりとして動きでサラを追う。それに焦った様子は無い。

「止まれ！」

サラの目の前に2人の軍人が現れる。

狭い路地裏で彼等を掻い潜るのは不可能。

しかし、彼等を薙ぎ払えば通れる。

その結論に達したサラは足から装飾銃を抜き、一人目の軍人の足を撃つ。

ダァン！

短い音と共に一人目の軍人が崩れ、二人目の軍人が焦ってショットガンを向ける。

しかし彼女は素早く二人目の軍人の懐に潜り込み、低い姿勢から伸び上がる反動を利用した掌底を下から二人目の軍人の顎に打ち込む。

「がっ。」

短く叫び、意識を失い崩れていく軍人の横を通り過ぎるサラ。

「あーあーあー。こんなガキにボロボロにされるなんてなぁ。」

サラは止まり、振り返る。

巨大な軍人が歩み寄ってくる。

「おまけにショットガンなんて持ち出しやがって、そんなもんぶっ放して死なせちまったらどうすんだよ、おい」

巨大な軍人が先程顎を打ち砕いた軍人の手首を踏んだ。

踏んだ瞬間その手首は千切れた。

「ぐっ、ぎっ・・・・・あがあああああああああああああああ！！？」

激痛に目を覚ましのた打ち回る軍人。

「うるせえよ、下等生物が」

その軍人に向かい、巨大な軍人はショットガンを連発する。

サラは動こうとするが、間に合わなかった。

蜂の巣にされた軍人は崩れ落ち、今度こそ何も言わなくなる。

それを見て、サラは憤慨する。

「ひ、人の命を、一体何だと思って・・・・・！！！」

「はぁ？こんな生物の事を気にかけちゃってるの？おいおい！お前正気かよ！？ぎゃはははははは！！！」

狂ったように笑う軍人に、サラの怒りは最高潮に達した。
軍人に発砲し、彼女の弾丸は軍人の腕にめり込む。
しかし、
ギィン！！
鈍い音と共に弾丸は弾かれる。
サラは絶句する。
ベース
「それの基盤はデザートイーグルか？それを片手で扱うなんざ、普通の軍人にもできない芸当なのに、すげえなぁ。あーあー、面倒臭くなっちまった」
一瞬で距離を詰め、サラの腹に殴りかかる軍人。クリーンヒットに、ノーバウンドで壁に向かって飛んでいく。
しかし、サラは身体を回転させ、両足を壁にぶつけて急所へダメージがいくのを無くした。
殴られる瞬間に装飾銃をガードに使い、身体へのダメージを軽減させたのだ。
装飾銃は傷一つ付かない。かなりの強度にも驚く所だが、彼女の身体能力もかなりの物だ。
しかし、壁にぶつかった彼女はそのまま倒れる。

「ガードしたけど、耐えられませんでしたってか？そりゃあそうだ、薄っぺらいガード一つじゃ無理だ。勢い余って殺しちまったかとヒヤヒヤしたぜ。ハハハハ！！」

口から血をこぼすサラ。軍人の腕は岩の様に変化し、元のサイズとは比較にならない程巨大化している。

彼もシャルヴァなのだ。

「う・・・・げほっ・・・・」

それでも、彼女は立ち上がろうとする。

軍人はサラの鷲掴みにし、引き摺る。

呻くサラを見て、軍人はニヤニヤと笑い続ける。

「さぁて、帰りましょうかね？鳥籠の中に。」

「だっ・・・・れが・・・」

「あー、ダメだな、躾がなってねえ。」

岩の様な親指と人差し指でサラの右腕をはさむ。

「あああああああ！！」

腕がミシミシと音をたてる。

絶叫するサラをみて、軍人はさらに笑みを深くする。

「その辺にしておけ、超絶変態ロリコンサディスト野郎」

後ろから解釈不能な声をかけられ、思わず両手を離す軍人。サラは床に崩れ落ちる。

直ぐに後ろを振り返るが、誰もいない。

「こっちだノロマ」

軍人はサラが居た方角へ振り返る。ソコには赤いコートに包まれた金髪の少年が居た。

少年は飛び上がり軍人の顔面を蹴り飛ばす。軍人は壁を突き破り、民家に飛び込む。

「一緒に軍を止めて欲しいだっけ？受けてやるよ、依頼。」

朦朧とする意識の中、サラはその少年を見て薄く笑う。

「で、報酬は？」

「平和な・・・・国。」

「ハッ、悪くない・・・・かもな」

ロキ＝ルナフォードが戦場に舞い降りる。

第１４話「圧倒的な差」

（なんだ・・・・あのガキ）

ロキに蹴り飛ばされた軍人は、身体に降り注いで瓦礫を払う。

「なんだ、まだ動けるのか？」

ロキが余裕の表情で軍人を見下す。

「まぐれの一発で何ハシャいでんだ。所詮不意打ちだろうが」

軍人はニヤりと笑い、拳大の瓦礫の一片を掴み、ロキに向かって思い切り投げる。

時速１５０ｋｍ等優にでていそうなその弾丸を、ロキは高速の居合いで欠片を斬る。

「じゃあ、格の違いっていうのを見せてやる。」

ロキが軍人に向かって走っていく。

シャルヴァ化はしていない。

軍人はロキが懐に潜り込むタイミングを見計らい、ロキ目掛けて斜め上から拳を振り下ろす。

ロキは飛んで避けるが、アスファルトが砕け、小さな破片が襲いかかる。

ロキは軍人の腕を掴み、右足で足を蹴り空中に跳ぶ。

「いいねェ！でかい口叩くだけはあるな！！」

軍人は嬉しそうに笑う。ロキが全体重を込め、剣を振り下ろす。

対する軍人は右腕でロキを殴り飛ばそうとする。

軍人の笑顔が消えた。

結果は一目瞭然、ロキの剣が軍人の岩でできた腕を縦に裂いた。

「あぎゃあああああああああああ！！？」

軍人が地面に倒れ転げまわる。

ロキはそれを見て笑みを浮かべる。

「アンタ、弱い癖にでしゃばり過ぎだな。」

「くそ、くそ、くそ、くそ・・・・・このクソガキがあああああああああああ！！！」

軍人が立ち上がり、左腕でロキを叩き潰そうとする。

ロキが振り向くと同時に、青白い電気がロキの体表をほとばしる。

軍人の拳がロキを捕らえる。

「はー・・・・！はー・・・・・・！・・・・・・・！！？」

軍人の顔が青くなる。

ロキは軍人の腕を受け止めていた。

単純な力ではなく、電気を利用し自分と相手の拳がぶつかり合う寸前に相手の拳を電気で正反対の力を生み出し、反発させたのだ。

「俺は余り頭は良くないが・・・・戦いの知識は今までの人生で染み付いてるんだよ。お前なんかに負ける筈がないだろう」

ロキが軍人の背後に一瞬で回る。その背後に回るまでに腹を切り裂く。（勿論峰打ちだ）

「大した事ないな」

ロキの圧勝だ。

第１４話「圧倒的な差」（後書き）

７／２４
誤字（脱字）がありましたので修正致しました

第15話「人として」

サラがゆっくりと目を開く。

「・・・・・・？ここは・・・・・？」

サラがかけられていたボロボロの布切れを取り払い、起き上がる。体の所々が痛む。特に右腕や腹部の痛みが酷く、地面に足をつき、ベッドを降りる際右手に力を入れた瞬間激痛が走った。

「きゃっ！！」

叫び声と共に崩れ落ちるサラ。しかし、崩れ落ちた先には硬い地面の感触は無く、何か分からないが柔らかい

「・・・・・・・ん？」

「重い。」

サラは飛び退いた。柔らかい物の正体はロキだった。頭を踏まれていた様で、こめかみに青い血管が浮き出ている。

「あ・・・・ごめん」

ロキはコートを毛布代わりに使って寝ている。コートの下の服はノースリーブのジャケットの様な物だ。どうやらサラが使っているベッド以外ベッドやベンチの様な物はなく、仕方なく床で寝ていた様

だ。

「色々とごめんね？」

「・・・・全くだ。依頼以外の事なんざ普通やる気も起きねェってのに」

「そういえば、本当にあの依頼受けてくれるの？」

「馬鹿みたいなリスクを負ってまでやる様なものじゃないしなー・・・・・パス」

「結局！？じゃあさっきの約束は破っちゃうわけ！？」

大声で叫んだせいで腹の傷に響いた様だ。腹を抑え、体を前のめりにする。

「・・・・・冗談だよ。いいから寝ろ。ここなら軍の追っ手もこないだろう」

「・・・・・ここは？」

「街からかなり離れた森林の中の廃家だ。昔依頼請負人の上司に当たったオッさんが住んでたそうだ。」

殺された。という単語は慎んだ。

サラは人の死等についてはうるさいからだ。ほんの少し話しただけでわかる。完全に表の世界の住人だと。

「・・・・その人、今はどこに？」

結局追求すんのかよ。

ロキは心の中で舌打ちした。

「さぁ、俺の上司じゃなくなってるからな、どっかで新しい部下でも引き連れてるんじゃないのか？いいから寝ろ」

「・・・・・私、何時間位寝てた？」

「今が夜中の３時だから・・・・・９時間だな。」

「じゃあ睡眠は十分だし、寝なくてもいいじゃん。」

いいから寝ろボケ！

と、ロキは無性に言いたくなったが堪える。

「私、あの屋敷の中じゃ決まった生活しかしてなかったから、夜明けって見た事がないんだよね～」

「ああそうですか。いいから寝てください」

「話したら目が覚めた。」

「はぁー・・・・・俺は寝てないんだよ、全く。ようやく寝ようとしたら１０分と立たずに目が覚める。誰のせいだっての」

「はいはい、ごめんごめん。それさっきも謝ったじゃない」

（・・・・・めんどくさくなってきた・・・・・・）

ロキは心の中で溜め息を付く。

これが普通の会話なんだろうか？ロキは疑問を抱いた。

それから4時間以上延々と屋敷の話を聞かされたりとして、ロキにとっては最悪だった。

・・・・最も、彼がそういうくだらない話をした事があるのは、サラと彼の上司しかいなかった。

ロキの事を化け物と見ずに、一人の人間として見て貰っている。

そんな気がして、ロキは少し嬉しかった。

第１６話「迷惑少女」

「あー・・・・眠い」

ロキは目の下に薄い隈を作ってしまった。一方もう片方のサラは何かかなり元気になっている。安静にしてろといったのに結構動き回れている。

「治癒能力か？」

「あー・・・あの能力は自分には使えないんだよね。」

確かに、良く見ると顔色が優れていなく、フラフラしている。

ロキは溜め息を付く。

「無理はするな。もう少しこの小屋でいってもいいぞ」

「ううん、もうこの街には居ない方がいいと思う。」

そして顔を曇らせた。

「・・・・ごめんね、この街に思い出とかある筈なのに」

ロキがまた溜め息を付く。

「一緒に軍を止めて欲しいとかいった癖に、どっちなんだよ」

「・・・・ごめん」

「依頼だし、依頼主が気に留める必要も無いだろ。・・・・報酬という報酬は無いけどな」

一拍子置いて、

「それより、軍をどうやって頓挫させるんだ？」

「え・・・・」

「いや、え。じゃないだろ」

「あ～・・・・ごめん、分かんない」

「・・・・お前、屋敷にいた間に何を考えてたんだ？」

「と、とりあえず行こう！・・・・あいたた・・・・」

大声を出したせいで痛みが帰って来たようだ。腹に手をあて、身体をくの字に曲げる。

「・・・・どこに？」

かまわず次の質問を被せる。こころなしか目に感情が篭ってない。

「・・・・とりあえず、隣町に。」

「俺この街から外に出た事無いからどういけばいいか分からないんだが、分かるか？」

「え、出た事無いの？」

「ああ、地図も見たこと無い。」

「・・・・・ごめん、私もここからどういけばいいかわかんない。」

「アホか。」

「あ、でも道があるでしょ？そこを通っていけばいいんじゃないの？」

「正規のルートなんて通ったら軍に見つかりますね」

ロキの口調が敬語になる。距離を置かれたことが伝わったのか。サラが慌てて取り繕う。

「じゃ、じゃあ地図とか買えば大丈夫」

「街中に軍人が溢れてると思いますよ。隣町も危ないですけどね」

「・・・・う～ん」

「とりあえずは、依頼請負人の連中に色々と手配して貰う。ギルドにまで手が回っていなければそれ位はできるだろう」

依頼請負人は言ってしまえば唯の「何でも屋」で、不公式な職業なのだ。故に裏の仕事や不正取引、ボディガード等の危険な仕事も多いのだが、軍とはなんら関わりの無い。おまけに陰気な所に住んでいる連中が多い。

故に軍に気付かれる事もなく目的を果たす事ができる。
最も、軍とギルドが手を組んでいなければだが、その確立は低いとロキは推測している。
ロキは裏の仕事では有名で、彼が関わった依頼は全て滞り無く完璧に遂行されている。
今までしくじった事が無いのはロキ一人だ。優秀な人材を手放しはしないだろうと踏んでいる。
「できれば道案内の人間も連れていくが、期待はできないだろうな。」
「私はどうすれば？」
「ついて来るのが一番いいな。ここにいて捕まったら今度こそ助けられない。ここから街まではかなり離れてるけど、行けるか？」
「大丈夫、これくらいなんて事無いから。」

第17話「胎動」

遡る事5時間、
AM3時。

「あはは♪結局サラを連れ帰れずに帰ってきちゃったんだぁ？」

少女の声がその部屋に響く。前にロキに倒された、腕の質を石に変化させる男が無言で佇んでいる。

対して椅子に座り、男を嘲っているのは長い金髪の少女だ。茶色のブレザーに、赤と黒のチェック模様のミニスカート、黒いタイツを履いている。ちなみに、ツバキは壁に寄りかかって目を瞑っている。

「なんとかいってよ。このままじゃ上司の私がしかられるんだからぁ。一体何者の介入があった訳？」

長い金髪の少女は自分の髪の毛を弄び、ぶすっとして表情で質問する。

「わ・・・・分からないんです。金髪の赤いコートのガキだとしか・・・・」

「ロキ・・・・かなぁ？ねぇツバキ、その子ってそんなに強いの？」

質問の方向をツバキに変える。対するツバキは溜め息を付く。

「まぁ、確かにコイツみたいなクラスのシャルヴァには勝機がないやろな。でもアリスちゃんとやり合ったら即終了、ゴミ箱行きってレベルの奴。」

「強くないじゃーん。っていうか何でその程度の奴にツバキが負ける訳ー？『人間』とはいえ、アンタも結構できるんでしょー？戦闘要員でレベル４いってるんだし、私と階級が同じなんでしょ？」

「いやぁ、ちょっとセコい手使って少佐まで上ってきたモンやから。実力は大した事あらへんよ。磔（はりつけ）のアリスには程遠いやろなぁ。」

「ばっ・・・そんな呼び名、どこで拾ってきたのよ！それ嫌いなんだから！」

二人の会話に残された巨大な軍人。彼の頬を汗が伝う。

サラを捕り損ねたせいで、彼は今ここにいる。

（っつか何でツバキは咎められねえんだ！どう考えてもおかしいだろうが！）

「何でツバキ佐官が咎められないか・・・・ですか？」

何時の間にか背後に現れた黒髪の少女。彼女もロングヘアーだが、アリスとは違いしっかり軍服を着ている。アリスよりも身長が高い。

お、という声と共に男に注目するアリス。一方ツバキはニヤりと笑った。

「そんなもん、きまっとるやないか・・・・・・徳や！！」

アリスがツバキの膝を蹴り飛ばす。ツバキはバランスを崩し、膝を地面について瞬間、椅子の前にあるテーブルの角で頭を打ち、倒れる。

（なんだコイツ・・・・まるで俺の心を）「読んでいる様だ、ですか？そのとおりですよ。私のはそういう能力ですから」

黒髪の少女はアリスの方に歩いていく。

途中でツバキを踏んで、「ごめんなさい」と謝る。対するツバキはうつ伏せになったまま「あいあい」と気のない返事をする。マゾの気があるのかもしれない

「やーやーコハルちゃん。わざわざジパングの方から何のために？」

アリスがひらひらと手を振る。

「来たるべき戦争に備えて、私も動きやすい様にこの地区に移動させられました。この部屋にしばらくご厄介になりますので」

（来たるべき戦争？何のハナシや？）

ツバキが顔を上げる。ツバキに心を読む能力を発動していないため、その心を読み取られる事はなかった。

「んで、この馬鹿野郎の心を読み取ってくれないかなー？例えばー・・・私達に対して服従する意思があるか。勿論業務上でだからね？

お姫様気分とかじゃないからね？」

「分かりました。それと最後の説明は適切だと思われます。若干引きかけましたので」

（おい。嘘だろ！？やめろ！そんな事したら・・・・・・！！）

「結果。全くありません。」

「あっそう。つまんねー」

アリスが指をならす。

パキン、という音と共に一瞬で男の足元に半径２m位の妙な丸い模様が浮かび上がる。そして、その陣に向かって先端が尖った十字架が４本落ちてくる。軍人の手足に一本ずつささり、地面と連結させる。

男が地面に這いつくばった状態で、アリスは更に指をならす。

「じゃあね。来世じゃ良い子に産まれてねー。」

その言葉が終わる前に、その模様から一本の野太いレーザーが放たれる。身動きが取れない軍人は消し飛び、屋根が吹き飛ぶ。

「あーここが最上階で良かったわ。死体も簡単に片付いてラクだしね。」

（『陣』か・・・・レーザーから十字架まで手広くカバーか。）

ツバキが心で呟く。

アリスがつまらなそうな溜め息を吐き、デスクの傍らにある電話に手を伸ばす。

受話器を外し、シャープを数回押し、特定の番号を押す。一度も呼び出し音が鳴らず。相手が応じる。

「夜遅くまでお疲れ様です。ご用件は？」

電話の相手は１０代後半の少年だろうか。声が若々しく、少々高い。

「ロキ＝ルナフォードに関する身辺調査。あんまり期待はできないけど一応はしないとね。指名手配のランクは４でいいよ。」

「ああその件やけど、上のおエラいさんが『泳がせる』って事や。」

「？　どういう事？」

アリスの表情が険しくなる。

「どうも上の奴等から見れば興味深いらしいんや。ホラ現に俺もやられとるし」

ツバキの声は軽快だが、アリスの表情は曇っていくばかりだ。

「アンタ・・・もしかして何か知ってる？」

「・・・・・いや、知らんよー？」

ツバキは軽快な声のまま言った。アリスは溜め息を付く。

「あーあ。ブチ殺してやりたいわねえホント。」

アリスが指を構える。対するツバキはそれを見てアサルトライフルを取り出す。

「・・・・なーんてジョーダン♪分かったわよ。・・・・指名手配はなし。資料は私が気になるから、手に入り次第こっちに回して」

「了解しました。」

受話器が切れる。アリスは受話器を置いて立ち上がる。

「コハルちゃんも遠路はるばるゴクロー。私の方からは指令は無いから仮眠でも取ったら？」

「はい。ありがとうございます」

コハルは頭を下げ、部屋の外に出る。

部屋にはツバキとアリスの二人が残された。

アリスが指をならすと、天井に空いた穴が木材で塞がれる。

「さーてと、もう遅いし、バカも始末したし、もー寝ていいでしょ。」

アリスが歩き始め、ツバキの真横で立ち止まる。

「・・・・・来たるべき戦争。アンタは知ってる？」

小声でツバキに話しかける。ツバキはニヤりと笑い、アリスも笑う。

アリスはおとしなやかな笑顔だが、二人ともどこか凄みのある笑顔だった。

「・・・・情報交換ね。ええよ、ロキに関して俺が持ってる情報を出す。勿論口外しないのが前提でやけど」

「分かってるわよ。面白そうなネタだし、外に漏らして頓挫させるハメになったら私のクビが飛ぶでしょうし。」

第１８話「ギルド」

依頼請負人のギルドには２つ入り口がある。だだっ広い部屋の中間に仕切りがあり、裏と表を完全に分けている。

表はこれといって危険でもなく、単なる民間人からの依頼の受け口。

裏は訳アリのものばかりで、ボディガードやマフィアの抗争に参加させられたりとかなり危険な物だ。今までで多くの人間が命を落としている。

サラはそこから少し離れた場所の物影に隠れさせている。見張りの役割も兼ねているが、もしもの時に逃げる為だ。

その裏口をロキが叩く。

ドアが開くと同時にライフルの銃口が飛び出す。ロキは両手を上げる。

ライフルを向けている人物は４０代前後の体躯のいい男性だった。金髪でヒゲが濃い、青色の工事の作業服の様な物を着ている、余り飾り気の無い男だった。

「ロキか・・・・・入れ。」

ライフルを上げ、ロキを中に誘う。

ロキは鞘に収めた剣を握り、中に入る。中に軍人がいる、そういう危険性は拭えない。

中に入ったら奥の椅子に座った年を取った老人が話しかけてきた。

「よう・・・・爆発に巻き込まれて死んだものかと思ったぜ」

「アレくらいで死ぬほど俺はノロマじゃないんでね」

「お前の上司のウィリアム・・・・死んだぞ。同じ日に脳天に弾丸喰らってたそうだ。」

「ああ、知ってるよ。殺した奴から聞いた」

ツバキ＝トウヤ。それが殺した人間の名前だ。敢えてこの場では口に出さないが。

「そうか、知っていたか。それより何の用だ？」

「ちょっと色々と合ってな、アンタ等も知っているだろ？」

「アレで軍から目を付けられたか？」

「知らないのか？・・・・とりあえず、案内人を一人雇いたい。なるべく腕が立つ奴がいい。」

「お前が依頼を出すなんて初めてだな。よっぽどヤバい状況なのか？」

「らしい。それに少々腕が立つ奴がもう一人いるんだが、もしもの

時に俺一人でソイツを守れる自信が無い。」

「ふん・・・・・バダック。お前来月ポートタウンの方に異動だっただろう？付いて行ってやれ。」

バダックと呼ばれた男が立ち上がる。先程銃口を向けてきた金髪の男だ。

「コイツなら文句はあるまい？ガロムより強い奴はコイツしかいないだろうしな。そのガロムも今は療養中なんだが」

ガロムとは先日の施設爆破の際、ロキと共に唯一生き残った人間の事だ。

「ポートタウンまでなら送っていこう。」

ポートタウンとはここから街を２つほど越した所にある名の通り小さな港町だ。

「それでいいか？ロキ」

「ああ。そこからは船を使う。・・・・・それより、本当に知らないってことは、指名手配もされてないのか？」

「アシを残さずに達成したんだろ？お前って事を知られていないんじゃないのか？」

「・・・・そうか。ならいい、今のうちに出ておいた方がいいな。」

ロキは出口の扉を開ける。

「ロキ・・・・気をつけろよ」

「ああ。俺のアパート、片付けておいてくれ。別に必要なものもないしな」

老人の方を振り返らずに、ロキは言う。

ロキの後にバダックが続き、姿を消した。

第１９話「遭遇」

ロキとサラとバダックは、森林の中を歩いていた。山道として人が利用したのか、若干切り開かれているような部分も多々ある。

「バダック。今から行く街ってどんな所だ？」

「一言で言えば商業が盛んな街だな。」

ロキがバダックに尋ねる。バダックは大きめの旅行用のカバンを持っている。

サラは相変わらずフラフラと足許のおぼつかない歩き方で、かなり辛い様だ。

「あの娘はなんだ。」

「さぁな、俺にも良く分からない」

「良く分からない、か。そんな事でこんな事をするお前ではないだろう？」

「・・・・・それも、俺には良く分からない。」

「・・・・・・恋か。」

「なっ！！ばっばばばば馬鹿を言うな！！唯の・・・・い、命の恩人だ！」

ロキが顔を赤くして言い返す。こんな子供っぽい顔をするなんて、とサラは思った。

それ以前に、『唯の』命の恩人とはどういう了見なのだろうか、とも思ったが。

「フン、まぁいいさ。ところで目的はなんだ？」

「さあな。俺に聞くな。」

「じゃあそこの娘に聞こう。」

「え！？・・・・・い、いやー、そのー・・・・・直接的な目的は・・・・考えて無いんですよね。アハハ」

「駆け落ちか」

「親父クセェんだよ！！」

ロキが大音量で叫ぶ。サラにとっては腹が揺れて痛いので、勘弁して欲しい限りだった。

「ハハ、冗談だよ。軍に睨まれてるってことは、ここまで追跡があるかも知れんぞ？」

「・・・・・・ああ。」

ロキが鞘に収めた剣の柄を握り、立ち止まって構える。バダックが両腕の袖を捲くるとそこには革ベルトで固定された小さなナイフが両腕に４本ずつ収まっていた。指の隙間でナイフの柄を挟み、４本

一気に引き抜く。

サラもホルダーから銃を抜くが、ロキに片手で静止された。

「体調まだ万全じゃないだろ。下がってろ」

次の瞬間、9体の怪物・・・・『アルケニ』が四方八方から襲い掛かる。

2体が雄叫びを上げ、ロキに噛み付こうとする。

ロキは一瞬の抜刀で刀に充電（チャージ）していた電気を真空状にして解き放った。2体のアルケニの足と胴体をそれぞれ切断する。

吹き飛んだ足がバダックへ向かい飛んでくる。それはバダックに触れる前に粉々の肉片に変化する。意外な事に、ロキの能力に驚いた様子は無い。

「そこの子供にこんな血生臭い所見せていいのか？」

「これ位馴れて貰わないと困る。」

バダックが大柄の体躯に似合わない素早い動きでアルケニの懐に潜り込む。一体目を切り刻み、ほんの一瞬で細切れに変える。その直ぐ右隣にいたアルケニもほぼ同時に原型を留めなくなる。

サラはその時考えた。

唯の人間にしては強過ぎる、と。しかしバダックからはシャルヴァの能力の発生は見られない。

彼は正真正銘「唯の人間」なのだ。実力は恐ろしい程あるが。

そのサラの背後からアルケニが忍び寄る。ある程度距離を詰めたところで大口を開いてサラを喰おうとする。

しかしそのサラも人間にしては十分強過ぎた。

銃を一瞬で抜き、口内へ一発打ち込む。普通の動物で脳髄がある部分を通り抜ける。次に心臓を打ち抜く。冷静に。

「ほう、結構できるなあの娘。」

「言っただろ？腕が立つ奴だって。」

ロキとバダックは既に残りのアルケニを葬っていた。ロキは最初に足を切断したアルケニの脳髄に剣を刺し込んでいたが。

「しかし・・・・なんだコイツ等は？」

バダックが切り殺したアルケニの首だけの死体を蹴り転がす。

「アルケニって奴らしい。この前の同業者を一体で二人殺して、ガロとやらも肩をやられた奴だ。」

「ガロムだ。ムを忘れてるぞ。アイツをやる様な実力は無い様だが・・・・」

「固体の違いですよ。」

背中から声が聞こえた。背後にはハイヒールにムチにチャイナドレス・・・・といった、そこらの漫画でもそうそうお目に掛かれないお嬢様の姿をしている。

「・・・・・俺の嫌いなタイプだ。」

ロキが顔を真っ青にして言う。。それに賛同し、バダックも諦めた様に溜め息を付き、首を左右に振る。人に敬意を持っているであろうサラも「うわぁ・・・・ほんとにいるんだ」等と呟いて、ハッとして口を塞ぐ始末だ。

対してお嬢さ・・・・女性は気にした様子も無く、

「本当はＡ－０４２を始末する為だったのですがね、どうやらそれ以上に大きなターゲットに出会ったようね。」

「やっぱり狙いは私なんですね？こっちも色々と事情があるので」

サラは銃を構える。

「何より、あんな場所に戻る気はありません」

「貴方に意見なんて求めてなくてよ？貴女がここで捕まる事実には変わりないの。オーッホッホッホ！！」

「有り得ん。あんなタイプの人間いるものなんだな。クラクラする。」

頭に手を当て、長い溜め息を付くロキ。

「世界は広いものだ。よく覚えておけロキ。俺の代わりに。」

バダックも若干怪訝そうな瞳を女性に向ける。

「貴女、恥ずかしくないんですか？ちょっとファッションセンスが～・・・・・・」

サラまでもが憐憫の眼を向ける中、女性は薄く笑った、そして待っていたのは・・・・・・

「あ・ん・ま・り・調子クレてんじゃねえぞテメェ等あああああああああ！！！」

激昂。

第２０話「アルケニ」

女性が鞭を地面に叩き付ける。

「来るぞ、気をつけろ。」

バダックが言う。

ロキは今回は居合いの構えではなく中断の構えをする。サラは銃口を女性に向けたまま微動だにしない。

「そこ、危ないですわよ」

女性が地面を指指す。その指した地面から無数の蔓が飛び出る。

「なっ！！」

居合いの構えではなく、中段の構えをしていた為ロキは蔓に対応できなかった。仕方なく避けるが、その後ろにいたサラに巻きつく。

土の中から現れたのは、巨大なラフレシアの様な花弁を持つ植物だった。その花の中央には巨大な口が付いている。

「これもアルケニか？おいサラ、おい・・・・・？」

振り返った先にサラはいない。

「何で避けるの！？バカーーーーーっ！」

空中で蔓に縛られて身動きが取れないサラを発見する。それを見るなりロキは

「早速捕まったか。全く」とか言う始末だ。

「君が避けるからでしょうが！！ってちょっと・・・ウソでしょ？早く助けてーーーー！！」

サラがアルケニの手前に寄せられる。バダックはやれやれと言わんばかりに首を横に振り、ロキに言う。

「どうでもいいから・・・・・助けないか？」

「それもそうだな、手間がかかる奴だ。」

「だーかーらあああ！！」

サラが叫ぶ。それが号令になった様にアルケニが蔓を飛ばす。ロキは走り込み、蔓を交わし、あるいは切り落とし、瞬く間にアルケニに飛び込んでいた。

ロキがアルケニの口元にまで運ばれたサラの蔓を切り落とす。うまく身体のバランスを整え、サラは地面に着地する。ロキは直ぐにアルケニとの対戦に戻る。

サラが呻き地面に手を付く。

（傷が・・・・・・ッ！）「あぐっ！！」

何時の間にか女性がサラの目の前に現れ、サラの腹を蹴り飛ばす。
サラは後ろに飛び、地面に倒れる。
「あら、手負いだったの？これといって何もしてないのに痛そうね。」
「う・・・・」
サラは起き上がろうとするが、激痛に耐えられずに立ち上がれない。
「まだまだこれからよ？これ位でヘバってちゃ面白くないじゃない。」
「ほんっとうに・・・・何から何まで趣味が悪いですね・・・・・っ」
弱弱しい声で言い返すサラ。女性は歩み寄り、地面に倒れたサラを踏みつけて追撃する。が・・・・
「！？」
蔓がが女性の足に巻きつく。
「貴女アルケニを扱う能力に長けている・・・・あのアルケニ、地面に与える衝撃で扱ってますよね・・・・？それを根が捕らえて・・・・標的を察知する。」
「貴女・・・・どうやってこれを！？」
「かん、たんです。さっき貴女が地面、に鞭を叩き付けた場所から蔓が出てきた。でもさっき私が叫んだ時、貴女は小石、を地面に投

げてました。それはどん、な小さな衝撃でも受け取るという事でしょう？私が蹴り飛ばされて、今貴女が立っている場所にポケットの弾丸を埋め込んだんです。あのアルケニ、は反射が遅く、少なくとも４秒は掛かってました」

息絶え絶えにサラは言う。

「初めて戦った相手の特性を利用するなんて・・・・・嘘でしょう？」

「唯の推測からですけど、・・・・うまく・・・・・・いく物ですね。ちなみにここに飛ばされた際の蔓・・・・・はロキ君が切り落としてくれました。だからこうして無事なんですね。」

女性は恐怖に怯えた顔をする。これから彼女はアルケニの餌にされるのだから。

「どうですか？切り札を奪われた気分は」

冷酷な声で、静かに彼女は言った。

「きゃあああああああああああ！！？」

女性が空中で振り回される。サラは叫ぶ。

「ロキ君、バダックさん、動かないで！！」

ピタリと動きを止めた二人には蔓が襲って来ない。触覚以外はこのアルケニにはないのだろう。

サラが立ち上がり、銃口をアルケニに向ける。正確には、アルケニの口の中、その奥にある心臓の様に脈打つ物体。

アルケニがこっちを向き、蔓を飛ばす。

サラが銃の引き金を引く。

弾丸は女性の頭の数センチ下を通り、口の中へ進み・・・・心臓の様な物に直撃する。

アルケニは急に真上を向き、口から緑色の液体をごぼりと吐く。そしてあおむけに倒れて動かなくなった。

サラも跪(ひざまず)き、地面に倒れ込む。

蹴りのダメージが大きかったのだろう。サラは完全に気を失っている。

「あれが居たら別に俺じゃなくても全然良かったかもな。」

バダックが言う。

「フン・・・・相性が良かっただけだろ。」

ロキはサラを抱える。

「しかし甘いな。あんな奴別に殺してもいいだろう。」

「犠牲者はださないんじゃなかったのか？」

「別に・・・・相手がどうなろうと俺の知った事じゃない。関係ない奴を殺さなかったらそれでいい。」

ロキが立ち上がる。

「行くぞ。余計な時間を食った。」

第２１話「鮮血の悪魔」

一方ロキから少し離れた森林の中で、彼等は別働隊の目標を発見した。（別働隊と言っても、化物を好んで引き連れている気色悪い女一人の隊だが）

標的の名は「Ａ－０４２」。本名不詳の単なる実験動物。

容易いと思い、彼等はそれに手を出した。

しかし、

「何で・・・・こんな・・・・・・！！」

怯える男の前にできているのは血の海だった。

ほんの数十秒前、隊員の一人がＡ－０４２に発砲する。

その弾丸はＡ－０４２の胸に当たった。が・・・・・

Ａ－０４２は一瞬で水に変化する。そして変化した瞬間発砲した隊員のこめかみが水で作られた剣に刺される。

「何だ、お前等？」

刺したのは言うまでも無く、Ａ－０４２だ。

ビクビクと痙攣している隊員から剣を抜く。隊員が一斉にＡ－０４２に銃を向ける。

「質問に答えろ」

「くそ、化物が！！」

次の隊員がライフルをＡ－０４２に向けた。次の瞬間地面から突如現れた鎖鎌状の水の刃がその隊員の両腕を切断する。

「あぎゃあああああああああああああああ！！？」

返り血を浴びたＡ－０４２が強烈な殺意を持った目で隊員達を見る。

とても少年には見えない・・・・・・

いや、人間には見えなかった。返り血を浴びた悪魔だ。

「もう一度言う、質問に答えろ」

「あぎっあっ・・・・うわあああああああああああああ！！！」

一人が錯乱したせいで隊員全員にそれが回り、銃を乱射する。

そして数十秒後、

そこ軍隊を統率していた者のみが生き残り、他の人間は無残な肉片に変えられた。

「お前一人で・・・・いいか」

「う・・・・・・うわ・・・・・っ！！」

ホルスターに収めた拳銃を取り出し、Ａ－０４２に向けるが、向ける途中で腕を切り落とされる。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！！」

「お前・・・・・俺の名前を知らないか？」

男の身に起こった事を無視し、それを尋ねる。

男からすればただからかっている様にしか見えない。

「あがっ・・・・・・な、名前・・・・？」

「そうだ、今どうしてもそれがいる。それが『鍵』になっているらしいからな」

「し・・・・知らない！！俺は何も知らない！た・・・・たすけ」

「そうか」

水の槍が男の周りから８本現れ、全てが心臓を刺す。

「ぐぶっ！！あ・・・・・・」

男はろくに断末魔も上げる事ができず、絶命した。

返り血を浴びた悪魔は、何事も無かったように歩み始める。

血の海を背に。

第２２話「交差する二人・１」

「んで、なんだいこりゃ？」

白衣の医者が言う。医者の割りには不衛生そうで、何処か酒臭い。

「コイツに聞いてくれ」

バダックが親指で壁に寄りかかって目を瞑ったロキ（しかし眉がピクピクと動いている）を指す。医者は溜め息を付き

「・・・・・駆け落ちか？」

「何で怪我人から駆け落ちを連想するんだ！？」

ロキが顔を真っ赤にして叫ぶ。医者は無視し、バダックに視線をやる

「どうやら外に情報を漏らさない方がいいのかねえ？」

「そうしてくれ、料金もちゃんと持ってる。」

バダックは現金の入った財布をそのまま医者に渡す。医者は財布の中から金を確認し、バダックに向き直ると

「まいどあり。」

と、短く言った。

「さて、治療の邪魔になるから出てってくれ。泊まるのなら隣の部

屋を使って構わんよ」

「すまないな。」

バダックは短く告げ、部屋を出る。ロキはサラを凝視したまま動かなかった。

「・・・・・心配か？」

「べ、別にそんなんじゃない！そいつは依頼人だから・・・・・」

「そうかい、不安そうな目をしてたからな。さ、出てってくれ。別に命に別状がある訳でもないし・・・・・直ぐに回復もしないだろうが。」

医者に促され、ロキは部屋を出る。おん

バダックが壁に寄り掛かって待っていた。

「お前等が軍に追われてる理由はあの娘か？」

「流石に気付いたか」

「さっき倒したアルケニ使いの女が聞いても無いのに教えてくれただろう？あの娘は一体なんだ？」

「さあな、本人にでも聞いてみれば分かるだろう。今日は疲れた、早く寝たい」

ロキが隣の部屋に向かおうとする。

「それともう一つ、素性も分からない彼女の依頼を受けた理由は？」
「この前の研究所での一件で、ある奴が俺の事をシャルヴァって言ってた。それに、ツバキという奴が俺を試したいた様な事も言っていた。
「つまり、軍はお前も狙っている、という事か？」
「多分、な。それに俺の過去についても何かあるかもしれない。サラはそのついでだ。」
「その『ついで』というのが俺は気になるんだ」
バダックは壁から背を離し、ロキの肩に手を置いて言った。
「お前も、少し変わってきてるんじゃないのか？」
「何を言ってるのか、さっぱり分からないな。」
「その内分かるだろう。」
バダックは肩から手を離す。そして医者から指定された部屋の扉を開け、その部屋の中に消えていった。」
（俺が変わる・・・・か。）
少し照れくさいが、本当にそうかもしれないとロキは思う。

暗闇の中で一人の男が発砲する。相手の少年に弾丸が当たる前に銃弾は水の壁に埋もれ、失速する。「ひ。」と短く男が悲鳴を上げた瞬間、Ａ－０４２の水で作られた剣が一人の軍人の腕に突き刺さる。

「ぐあああああああああああっ！！？」

「もう一度聞く、『ファイル』はどこだ？次は足を切り裂くぞ」

感情の篭らないＡ－０４２の声に、軍人は怯えながらも言い返す。

「し・・・・知らない！『ファイル』の居場所は機密事項お前も知っているだろうが！！っぎゃあああああ！！」

問答無用で足を刺すＡ－０４２。軍人が絶叫するが、既に両腕を潰されており、動かせない。

「・・・・・最後だ。言わなければ殺す」

「知らない物は知らないんだ！助けてくれ！ま、まだ死にたくない！！」

Ａ－０４２は剣を高く掲げ、振り下ろそうとする。しかし、その腕はピタリと止まる。

「・・・・・？」

軍人がＡ－０４２を見る。

「いいだろう、生かしてやる。その代わり条件がある、俺の討伐を

命じた人間がこの街にいるな？ソイツに伝えろ。返して貰う、とな」

第２３話「交差する二人・２」

まだ朝日も昇っていない時間帯にロキは目を覚ました。
（・・・・眠りが浅いな。）
ロキがベッドからムクリと起き上がる。バダックはかなり疲れたのかスッカリ寝てしまい、隣の部屋からももう物音がしない。
ロキは隣の部屋の様子を見にいこうとドアを開け、廊下に出る。
そしてそれと同時に、隣の部屋のドアも開く。
「・・・・・ロキ君？」
出てきたのはサラだった。
「・・・・・・此処は？」
「バダックの知り合いのヤブ医者の診療所だ。医者かどうかも怪しいがな。」
ロキが溜め息を付く。
「まだ顔色が悪いぞ。寝ろ」
「んー・・・・目が覚めてね。」
「無理に動くなよ。怪我人は大人しくしてろ。」
「・・・・・うん。ごめんね、心配してくれてありがとう」
「べっ別に。心配なんかしてない」
彼はそういいながらも顔は真っ赤にしている。その様子を見てサラはクスクス笑いながら
「面白い。」
と、言った。
「あぁ！？」
「クールかと思ったらそうでもないんだね。」
「仕事柄、舐められないようにしてるだけだ。」
「ふーん？」
「何だ？」
「気取ってるんじゃなくて？」

ピクりとロキの動きが止まる。そして無言のまま電流の音が鳴り始める。
「ウッ、ウソウソ。でもクールっていったらＡ－０４２君位じゃないとね」
「凄い呼び方だな・・・・アイツの本名はそれなのか？」
「違うよ。最初に来てるアルファベットはそのシャルヴァの基本的な能力の強さだから。まだＡランクのシャルヴァは国内では４９人までしか確認されてないしね。」
「Ａ・・・・か。じゃあ俺はどれくらいなんだ？」
「んー・・・・・良く分からないなあ、外の世界に出るのなんて久しぶりだし・・・・・多分良くてＣじゃないかな？」
「なっ・・・・お、俺はアイツに勝ったぞ！？」
「能力だけで全部が決まる訳じゃないからねー。戦闘力には『レベル』っていう枠組みがが適用されるんだよ。」
「・・・・面倒くさいな。そもそもなんで軍はそんな事ばっかりしやがる？他の国との戦争に備えてるにせよ、これはやり過ぎだろうが。」
「・・・・ねえ、ロキ君。」
サラが窓枠に手をかけ、窓の外を見ながら寂しそうに言う。
「今まで、一体何人の人間がシャルヴァの実験に使われたと思う？」
「・・・・・さあな。興味が無い」
「５０００万人。その内約３７００万人が拒絶反応で死んでるんだよ。」
短くサラが言い放つ。
「他の国も合わせたら、どれくらいになるのかな・・・・・私は嫌なんだ。お父さんとお母さんを殺した子供みたいな人が沢山いるんだよ？」
サラは窓枠を握り締める。
「ロキ君は・・・・・どうなの？」
「・・・・・正直、俺には分からないな。人の命なんて、かまっち

ゃいられない所で生きてきたから」
ロキは微笑を浮かべる。どこか寂しそうな笑みを浮かべて続ける
「『今の記憶の俺』の一番最初に見た物はなんだったか教えてやろうか？」
ロキはここで言葉を区切る。そして少し間を置いてこう言った。
「血塗れの俺の両手だ。俺はさ、最初から人を殺してるんだ。」
サラは黙って聞いている。
「人殺しの俺に、人を救うなんて無理だ。実際に今も、俺達を殺しに来る奴の命なんてどうでもいいって思ってる。俺はお前ほど立派で優しい人間じゃないから。」
お世辞ではなく、また嫌味や皮肉などでも無く、ロキは言い放った。
実際にロキはそう思っている、思わされるのだ。
彼女と話していれば分かる。声も、眼差しも、何もかも真剣な彼女の言葉には何一つ偽りは無い。
「・・・・・でも」
サラは窓枠から手を離す。そしてロキに歩み寄る。
「君は私を助け出してくれたでしょ？その後も私を助けてくれた。人殺しにはそんな事できないよ」
「・・・・・俺は・・・・・」
ロキは自分の掌を開き、見つめる。
サラがその手をとり、両手でぎゅっと、強く優しく握り締める。
「変われるんだよ？人は過去に何があっても、心一つで変わる事ができる・・・・・私はそう思ってるから。」
彼女の眼には涙が溜まっていた。真剣な眼で、強くロキを見る。
「人はいつでも変われる・・・・・か」
ロキはサラの眼を見る。そして深く溜め息を付いた。
そして、サラの手を振り払う。
「！？」
サラが目を大きく開いて、ロキを見る。
「ならお前は人を殺したことがあるのか？ないだろう？あったら今

のお前みたいな甘い発言は出来ない。」
「でも、君は・・・・・」
「・・・・・哀れか？人を殺して、それに苦しめられている俺が」
「・・・・・・・」
「俺には慰められる資格なんてない。罪もない人を殺した罪は消えないからな。」
そして、サラを追い詰める様に続ける。
「・・・・・お前はあのアルケニ使いを殺さなかったな？酷い仕打ちを受けても殺さなかった。でも俺はお前ほど優しくは無い・・・・・敵は殺す。そんな人間だ」
「君はそんな人じゃない！」
「ふざけるな！！」
ロキが叫び、壁に拳を叩き付ける。サラはビクッと肩を震わせた。
ロキは思いきり壁を殴りつけたせいで出血しているが、そんな事は気にも留めなかった。
「余計なお世話って言ってんだ！俺はそんな人じゃない・・・・だと？お前には俺の事は分からないだろうな。住む世界が違うからな。」
ロキは振り返り、寝室に向かう。
ドアを開けた所で、サラを見て言う。
「・・・・俺はもうそっちには戻れないんだよ。」
サラはまだ何か言おうとしていたが、ロキは目も暮れず、ドアを閉めた。

第２４話「それぞれの動き」（前書き）

申し訳ございません、最近色々と忙しくて更新ができませんでした。
気付いたら一ヶ月・・・・・サボりなんてレベルじゃないっすね。。。。
この小説を覚えている方がいるかわかりませんが、また頑張らせて頂きます！

第２４話「それぞれの動き」

「そうか、スレインがこの街に・・・・」
明け方、一人の軍服を纏った男が電話に向かい話す
「貴方を狙って彼を討ち取る。それが貴方の任務です。」
「・・・・・」
「できますか？」
「どうだろう、あいつは強かった。記憶を抜く前での話だが」
「彼の精神の全てを抜いたが為に彼の成長は止まりました。最初は問題になりましたが・・・・・・では、吉報をお待ちしています」
電話が切れ、男は受話器を戻す。

「サラとバダックはどうした？」
ロキはサンドイッチをほおばりながら医者に尋ねる。
「バダックは軍の情報を仕入れに、嬢ちゃんは散歩に行って来るとかいってどこかに出かけたぞ。怪我も全快じゃないのにな。」
「ばっ・・・・あいつ、懲りてないな・・・・・」
「どうした、カノジョが心配か？」
「斬っていいか？」
ロキが若干本気で脅迫してくる。医者は相手にせず首に手を当て首を左右に動かす。歳で凝っているのか鈍い音がロキまで聞こえてくる。
「大丈夫さ。お前さんがいた街とは違ってここは軍の施設は無え。しかし、お前さん達何して軍におっかけられてんだ？」
「さあ、俺も良く分からない内になったからな。元凶があいつって事だけは確定してるんだが。」

ロキはコートを着る。そのコートに剣を隠し、診療所の玄関を開ける。
「なんだ？結局探しにいくのか？」
「ああ、軍に見つからないっていう保障はないし・・・・それに、会ってから言いたい事がある。」
ロキは玄関を閉め、早歩きで出て行った。

サラは市場の道を歩いていた。大規模な人ごみができているので、見つかる事はまずない・・・・と思う。

（は～・・・・喧嘩しちゃった・・・・・どうしよう、これから大丈夫かな）
別にサラのせいでもないのだが、責任を感じていた。
下を向いてトボトボと歩き続ける。

「止まりなさい」
サラは立ち止まり、顔を上げる。
すぐ目の前に軍人がいた。
サラは焦って銃を取り出そうとする。が、素早い動作を取ってしまったため、脇腹が痛み、膝を地面についてしまった。

軍人は彼女に手を伸ばす。
「どうした、気分でも悪いのか？」
軍人は彼女の肩にポン、と手を置いた。
え？サラは間の抜けた声を出す。
良く前を見ると一体を囲っているコーンが並んでいる。通行止めらしい。
「す、すみません。良く前を見てなくて。」
「気をつけなさい。」

サラは心の中でホッと安堵の息を吐き、さっさとその場を離れようとしたが
「ちょっと待ってくれ」
「っ！？（バレた・・・・！？）」
声をだし、立ち止まるサラ。
（このままじゃまた追い掛け回される事に・・・・・！）
また今日も散々な目に合う事確定！と思いつつ、振り返る
「な、何でしょうか」
ぎこちない笑顔でサラは振り返る。銃の入ったホルスターに手を掛けながらも
「君、この子どもを見なかったか？」
軍人はポケットから写真を取り出す。それには水色の髪と青い瞳を持った少年が写っている。
サラにはその人物に心当たりがあった。
屋敷にいた頃、彼女の護衛をしていた少年だ。
「・・・・いえ、分かりません。」
彼も追われている事を知っていたお陰でサラは冷静に対応できた。
「そうか、行っていい」
軍人から解放されたサラは溜め息をついた。
（まさか彼もこの街に・・・・？）

その頃Ａ－０４２は空家にいた。
何年間も使われていないのか、中は荒れていて、家具等も腐った感じだった。最早空家ではなく廃墟だ。
彼は一人佇んでいた。
何を考えているのか、己ですら分からない。
ただ、名を、感情を、記憶を、全てを取り戻す。

彼の目的はそれだけだ。

そんな感慨にふけっていた中、床の軋む音が聞こえた。もちろんＡ－０４２のものではない

Ａ－０４２は咄嗟に振り向き、臨戦態勢を取る。

背後に立っていたのは軍服を着た金髪の若い男だ。

帯剣を装備しているだけで、他には何も持っていそうに無い。

「久しぶりだな。大きくなったものだ」

「貴様がここの指揮官か？その口ぶりだと俺の事を少なからず知っているようだな」

「知っていたとしてどうする？」

「力づくで吐かせる。それだけだ。」

第２４話「それぞれの動き」（後書き）

一ヶ月ぶりで頑張りますとかいいながらぐだぐだにしちゃうんですよねー

・・・・ダメだこいつ（俺）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0890h/

メ　ル　ト　ソ　ウ　ル

2010年11月13日15時07分発行